



第 23 号

平成 30 年 11 月 13 日発行

会 員 募 集 中

年会費 3,000 円

10 月以降入会 1,500 円

第 2 回「岡山の底力シリーズ」 来月開かれる

昨年度から始まった「岡山の底力シリーズ」の第 2 回目の基調講演、シンポジウム等を以下の要領で開催します。奮ってご参加下さい。

日 時：平成 30 年 12 月 16 日（日） 開場 13：10 開演 13：30～16：30

場 所：岡山県医師会館（岡山市北区駅元町 19-2 TEL：086-250-2100）

基調講演「経営雑感」

講 師：伊藤 謙介氏 京都セラミック(株)元会長

岡山の無限の可能性に期待し、次世代の若者に経験を伝えたい

伊藤氏は昭和 12 年生まれ、高梁市成羽町の出身。幼少より文学に惹かれていた伊藤氏は倉敷工業高校卒業後、技術の活用と文学修業を目指して文学的雰囲気漂う京都に所在の企業に就職する。翌年に同志社大学文学部に入学、会社では特殊磁器であるファインセラミックの開発、事業化に邁進された。その後、機会あって稲盛和夫氏と 28 名の仲間とともに、昭和 34 年 4 月 1 日に「京都セラミック」の創業に参画した。伊藤氏は直ちに文学修業は封印し、仕事に没頭する。同社は社員の英知と努力が奏功して多くの困難を乗り越えて飛躍していく。今や「京セラ」といえば世界に多種多様な製品を供給する企業に発展した。この間、伊藤氏は社長、会長を歴任された。その経験から、現在、後輩経営者、芸術家たちの指導、育成に活躍されている。今回、「経営雑感」と題して講演をいただく。



伊藤 謙介氏

伊藤謙介氏の作詞

朗読「備中神楽に想う」他 森 くにえ氏

歌唱「高梁慕情」 大久保俊子氏

シンポジウム「自然力、歴史力、学習力に充ちた岡山の底力」

コーディネーター 三宅 昇氏 岡山県産業振興財団理事長

パネリスト 佐古さや香氏 倉敷ボウリング機工(株)代表取締役

パネリスト 高田 聖次氏 (株)木村建築設計事務所代表取締役

パネリスト 光延由香利氏 画家 I 氏賞受賞者

歴・研・展・望

縄文の遺跡から桃の種、猪の骨が出土することを学び、遠い時代からの人と生物との関わり合いを知りました。歴史を生物、科学など各分野から繙くとその中には人間の生活があり、哀愁も感じ

られます。歴史的事実ととらえる上に、人として考え方、生き方を積み上げていきたいと思えます。

今年、9 月 29、30 日に舞鶴で開催された全国

藩校サミットに参加しました。東舞鶴は過去には軍港として、西舞鶴は城下町として栄えました。江戸時代には藩校、明倫館があり、その伝統は明倫小学校に受け継がれ、全体会議で 6 年生児童が見事に論語を素読発表しました。

幕末には片山淳吉（1837～1887）の「物理階梯」があり、その中の「物体の落下図（放物線）」

は高等学校教科書に「水平投射」として扱われている由、歴史探求の中に「不易（変わらぬもの）、流行（変わるもの）」を頭に置いて研究することも大切であることを感じました。

台風 24 号のため、市内巡りがストップし、発祥の地の「肉じゃが」が食べられなかったのは残念でした。（会長 石井 保）

二人の天皇の母 “吉備^{ひめ みこ}姫王” とは

富久 豊（会員）

はじめに

我が国の正史と言われる『日本書紀』には“吉備”と名の付く人物が幾人か登場するが、神話の世界や時代設定が明確にできない継体天皇（第 26 代）以前を除くと、その数は僅かに数名しかいない。その中でも天皇の皇子の子と生れ、後に二人の天皇の母となったのが“吉備姫王”である。それもあの『大化の改新』（乙巳の変）前後の二人の天皇（皇極天皇・孝徳天皇）の母なのである。

ところが、この姫王の出生については『日本書紀』には記載されておらず、15 世紀頃に書かれた『本朝皇胤紹運録』に、欽明天皇の第十皇子・桜井皇子の娘とだけ紹介されているのだ。そしてその母については全く記載されていない。確かにこの時代の天皇は複数の女性と関係を持ち、沢山の皇子や皇女を生ませ、更に同じ天皇の皇子や皇女も母が異なれば堂々と交わりを持った。つまり庶兄、庶妹等の関係は複雑をきわめていた。従って、姫王の母を特定するのはなかなか難しいのだが、この時代の天皇や豪族は女性を迎え入れるのではなく、自ら女性の館に赴いて交わったとされている。また、そこで生まれてきた子供は、女性の元で成人するまで育てていたらしい。そして生まれてきた皇子や皇女の呼び名は、女性の居住する地名や関係する豪族縁の名前で呼ばれることが多くあった。例えば、聖徳太子の王子・山背大兄王や天智天皇の幼名が葛城皇子と言った具合である。こうした事を勘案すると桜井皇子が“吉備”に縁

のある女性と交わった可能性が大きい。それもある程度身分の高い女性であることは間違いないであろう。果たしてその女性は誰か？また吉備国との繋がりとは？歴史書の中から紐解いてみることにする。

出生の秘密を探す

近鉄吉野線の飛鳥駅を降りると、駅前のロータリーに“ようこそ万葉の故郷飛鳥へ”の看板が目に飛び込んでくる。この駅からは、色彩豊かな壁画の発見で注目を集めた『高松塚古墳』を始め、蘇我馬子の墓ではないかと言われている『石舞台古墳』、それに古い天皇陵・寺社など、飛鳥時代の有名な史跡群を散策することができ、気候の良い休日などは沢山の歴史ファンで賑わいを見せるころだ。

歓迎看板を横目で見ながら少し行くと、国道 169 号線が南北に走っていて、それを渡り檜隅川に沿って数十メートル進むと、小さな橋と左に折れる道が現れる。その道を進み点在する住宅街を抜けた所に、小さな堀が見えてくる。この堀の向こうのこんもりとした杜が欽明天皇（第 29 代）陵である。そして陵への参道の中程左側に独立した形で小さな杜がもう一つあり、これが“吉備姫王”の墓とされているところだ。というのも、西暦 643 年 9 月に亡くなったと記されている『日本書紀』には、埋葬場所を“檀弓岡”としていて欽明天皇陵の埋葬場所の記述“檜隅坂合陵”とは明らかに異なるからだ。宮内庁が治定している天皇

陵には問題が多く、学者の中にも間違いを指摘するものが沢山いるが、その他の陵墓についても間違っただけの治定をしている所が多くあると言われている。(※歴代天皇の数より陵墓の数が多いのもその一つ)

それはさておき、この墓が吉備姫王のものと言いながら吉備国との繋がりとは全く記されていない。

吉備姫王の名は『日本書紀』の皇極天皇（第 35 代）即位前期に初めて登場し、天皇は吉備姫王と茅渟王との間にできた娘であると紹介されている。その後、皇極 2 年（西暦 643 年）9 月 11 日に、吉備嶋皇祖母命が薨去したと記され、同 17 日に土師娑婆連猪手に詔して、皇祖母命の喪葬の礼を監督させ、更に天皇は皇祖母命が病に臥されてから喪葬の礼が始まるまで、ずっと床の側を離れず、たゆまず看護されたとある。そして同 19 日皇祖母命の亡き骸を檀弓岡に葬ったとのことである。

この記述以外に吉備姫王のことだと言われているのが、孝徳天皇（第 36 代）の御世の大化 2 年（西暦 646 年）3 月 19 日、朝廷に集まった東国の使者に対し行った詔の中で「官司の所々の屯田及び吉備嶋皇祖母の処々で行われている稲貸を廃止せよ。屯田は群臣及び伴造たちに分け与えよ」と言った下りの記述がある。実は『日本書紀』にはこれだけの記述しかないのだ。これだけでは出生の様子は分らないのだが、前にも記した様に 15 世紀に書かれた『本朝皇胤紹運録』によれば、吉備姫王は欽明天皇と堅塩媛（蘇我稲目の娘）との間に生まれた桜井皇子の娘であると記されている。しかし、母の名が不明である。では桜井皇子はどういう皇子なのか？

桜井皇子とは

『日本書紀』によると、桜井皇子は欽明天皇と堅塩媛（大臣蘇我稲目の娘）との間に産まれた第 10 番目の子で、桜井之玄王とも呼ばれていたらしい。そして同じ堅塩媛から生まれた豊御食炊屋媛（後の推古天皇）が第 4 子で西暦 553 年生まれだから、そこから推察すると桜井皇子は西暦 562 年～565 年頃に生まれていたであろうと思われ

る。それは欽明天皇が西暦 571 年に崩御しており、桜井皇子の後にもこの堅塩媛との間に三人の皇子・皇女を生ませたことになっているからだ。こうしたことから考えると、桜井皇子が成人になったのは、西暦 582 年～585 年頃ということになる。そこでこの頃皇子の周りにいた美しい女性は誰か？・・・それを探そうとする。

大和にあった吉備嶋とは？

吉備という地名は無論、吉備国のことを指しているのだが、大和国にも吉備国に縁の場所があったのだ。それはどこか？蘇我宗家一族が支配していた軽地区（現在の桜井市から明日香村・高取町一体）の中にあつた。実は蘇我一族と吉備国との繋がりには意外に深いのだ。

『日本書紀』によると

1. 欽明天皇 16 年（西暦 555 年）7 月、大臣蘇我稲目と穂積磐弓臣等を遣わして、吉備の 5 郡に白猪屯倉を置く。

※白猪屯倉＝現在の所在地は不明。ただ、『続日本記』の天平神護 2 年 12 月の条に、美作国大庭郡に白猪臣が居住していたことを示す記述があり、このことから白猪は大庭郡とする説が有力であった。しかし、白猪氏の分布が美作に限られないことから、屯倉は吉備の各地にあつたとする説など今は特定されていない。また、吉備の 5 郡名も不明だが、川島郡（下道臣の祖）、上道郡（上道臣・香屋臣の祖）、三野郡（三野臣の祖）、波区芸郡（笠臣の祖）、苑郡（苑臣の祖）が有力。

2. 欽明天皇 17 年 7 月、大臣蘇我稲目を吉備児島郡に遣わして屯倉（大和王権直轄の稲穀を管理する倉）を置かせた。また、葛城山田直瑞子を田令（たっかい）とした。※田令＝屯倉経営の担当で朝廷より出向。
3. 敏達天皇 3 年（西暦 574 年）10 月、大臣蘇我馬子を吉備国に遣わして、白猪屯倉と田部の増員を図った。※田部＝屯倉の耕作に従事した部民。

このように記載されており、蘇我氏が大和王権

の力を背景に、吉備国の鉱物資源や穀物などを管理し、蓄財を重ねていったものと思われる。そのことを裏付けたのが、馬子が飛鳥川のほとりに造った邸宅と園池で、当時としては珍しい池の中に嶋を築き、百済文化の取り入れを行ったのだ。

このことにより馬子は後に嶋大臣と呼ばれるようになり、またその嶋を“吉備嶋”と呼ぶようになった。これが大和の吉備嶋である。

※現在、奈良県桜井市に吉備という地名が残っており、その辺りにあったのではないかとと思われる。(桜井駅の南側) また、高取町役場の近くにも吉備という地名があるが、ここは地形的に見て山間地なので、園池を築けるようなところではないと考えられるので、私は桜井市を有力とした。

時代背景

歴史上、本来天皇になるべき人が早世や夭折したり、また権力争いに巻き込まれ失脚していく場合や、逆に全く予期しないのに争いの副産物的な形で、天皇になった人物も多々いる。こうした要素を沢山含んで即位したのがこの時代の天皇たちである。そして吉備姫王と茅渟王との間に生まれた王女と王子も正にそうした流れの中で誕生したのだと思う。

まず、第 33 代推古天皇が崩御（西暦 628 年）した時、皇太子であった聖徳太子がすでに死んでおり（西暦 622 年）、皇太子の座は空席であった。そこで権力争いが起きる。時の大臣蘇我蝦夷は、第 30 代敏達天皇の孫、田村皇子を推すこととした。しかし、境部摩理勢を筆頭に許勢臣、佐伯連、紀臣等は聖徳太子の子、山背大兄王を推したのだ。

絶対的権力者であった父、蘇我馬子の死から 2 年しか経ってない状況下で自身の権力を誇示したい蝦夷は、試行錯誤の末、摩理勢を殺害し、田村皇子を即位させた。舒明天皇の誕生である。

実は山背大兄王は蘇我氏の血筋であり、田村皇子は息長の血筋である。なのに、蘇我蝦夷はなぜ、田村皇子を推したのか？その理由は無論何処にも書かれてないので推測するしかないのだが、

① 蘇我氏への求心力の低下を防ぐ

② 古開の豪族たちの財力の確保にあったのではないか

※古開は應神天皇以前からの豪族で、それ以後渡来して力をつけて豪族になったものは今木（今来・今城）という。

推古天皇のもとで摂政として活躍した聖徳太子は、初めての遣隋使派遣や、冠位十二階・憲法十七条をつくり実質天皇のような政を行っていた。更に聖徳太子は斑鳩宮を造営し、そこへ移り住み、群臣を招いては『勝鬘經』や『法華經』を講義し、その名声を高めていった。その流れを受け継いだ山背大兄王が天皇になれば、間違いなく蘇我一族の求心力は低下する。蝦夷はそう考えた。

今一つ考えられるのは財力と旧豪族との取り込みだ。田村皇子は、その御名（息長足日廣額天皇）が示す通り息長一族（神功皇后）の流れを持つ豪族が後盾にいた。息長一族は近江一帯を支配下に治めており、蝦夷はそのあたりも考慮に入れて田村皇子を選んだのではないかとと思われる。それに田村皇子と蝦夷の妹、法提郎女との間には次なる天皇候補、古人大兄皇子がいるので、これでまた蘇我一族の天皇ができることが間違いないと考えた。しかし、法提郎女は身分上皇系ではないから皇后になることはできない。田村皇子に誰か皇女を充行、皇后にしなければならなかった。ところが田村皇子に思わぬ副産物が付いてきた。それは宝皇女（後の皇極天皇）である。宝皇女は始め、高向王の夫人として漢皇子をもうけていたが、3 年前から田村皇子とも関係を持っていた。そこで、蝦夷は自由な暮らしをしていた宝皇女を説得、皇后になることを条件に迎え入れることにした。

吉備姫王の出性

まず、“吉備嶋”近くに居住していた美しく、そして身分の高い女性是谁か？・・・ということになるが、それは敏達天皇と采女・菟名子夫人との間に生まれた糠手姫王女ではないかと思われるのだ。何故か？それではまず采女という女性の存在を考えてみよう。

采女とは・・・地方豪族の娘で才色兼備な者を宮中に女官として奉仕させ、天皇や皇后の側近くで日常の雑役にあたっていた女性のこと、特に美しい者は天皇の寵愛もうけた。だから菟名子も美しい女性であったことは間違いないであろう。その菟名子と敏達天皇との間に生まれた糠手姫皇女も、母に似て美しかったことは想像に難くない。そんな姫皇女は時の権力者、蘇我馬子にも気に入られたらしく、糠手姫皇女という呼び名以外にも田村皇女、宝王、嶋皇祖母などの渾名で呼ばれているのだ。このことから蘇我氏の拠点である嶋(吉備嶋)の近くに居住し、成人を迎えることになったと思われる。

この敏達天皇は、即位後始め廣姫を皇后とし、押坂彦大兄皇子ら 3 人の皇子・皇女を生ませたのだが、西暦 575 年に廣姫が亡くなると、額田部皇女(後の推古天皇)を皇后として迎え、7 人の皇子・皇女を生ませた。それ以外にも天皇は、二人の妃に 6 人の皇子・皇女を生ませている。こうした中でも後継天皇は最初の皇子、押坂彦大兄皇子と目されていたのだが、皇子が成人する前に敏達天皇が崩御してしまったのだ。そこで、大臣蘇我馬子は西暦 585 年、蘇我の血をひく用明天皇を擁立し権力の掌握を図った。

ところが、用明天皇は 1 年 8 月で崩御してしまった。馬子は再び蘇我の血をひく泊瀬部皇子(崇峻天皇)を擁立した。だが、こうした政権運営に不満を持ち、しかも廃仏論者でもあった物部守屋が蘇我馬子と衝突、両者兵を集め戦ったのだ。守屋は穴穗部皇子を擁立し、一方馬子は敏達天皇の皇后、御豊食炊屋姫(後の推古天皇)を奉じて戦った。

この戦いで結局馬子が勝利するのだが、劣勢であった馬子側で 15 歳の厩戸皇子(聖徳太子)が束髪於額(ヒサゴハナ)にして軍の後ろにしたがった。そして戦況が思わしくないので白木で四天王像をつくり、「この戦いに勝利すれば、必ず護世四王のための寺塔を建立する」と、願いをたてた。

※これが四天王寺建立の起源になる。(四天王とは、東＝持国天、西＝広目天、南＝増長天、

北＝多聞天のこと)

6 月崇峻天皇が誕生し、新しい体制がスタートした。こうした中、やがて糠手姫皇女は成人を迎える。成人すると糠手姫皇女は、始め桜井皇子と関係を持ったのではないかと思うのだ。これは時の大臣蘇我馬子の意向によるもので、天皇家の血筋を蘇我一族で固めるための布石であった。

ところが、最初に生まれたのが女性であり、その後桜井皇子は亡くなり、馬子の思惑が外れた形となった。馬子が次なる手を模索している中、糠手姫皇女は庶兄である押坂彦大兄皇子と関係を持ってしまったのだ。仕方なく馬子は糠手姫皇女との関係を深めることを諦めたのだが、おそらくこの女性こそが吉備姫王ではないかと思われるのだ。無論、こうした記録は遺されていないのだが、その理由は糠手姫皇女と吉備姫王の渾名から推測されるのだ。そして生年は西暦 575 ～ 578 年ころと推測される。(※この時代、庶兄、庶妹が関係を持つことは珍しいことではなく、時には舎兄、舎妹の交わりも公になっていた。美しい女性には兄妹といえども性的関係が生まれ、むしろ血縁を強くする考えが働いた可能性もあり、それを問題視されなかった時代でもある。)

二人の嶋皇祖母

前述のように、この時代の貴族の男女関係は、男性が女性の家に通い性的関係をもっていた。また生まれた子どもは成人するまで女性の家で過ごし、名前も女性の関わりのある豪族や地名から縁のあるものが用いられることが多くあった。(無論例外もある。)従って名前や渾名を見れば、出生の秘密を探ることができる場合が多い。では、糠手姫皇女と吉備姫王の場合はどうか？

- ・糠手姫皇女の場合、糠手の呼び名以外に田村皇女、糠代比売、宝王嶋皇祖母などの呼び名があった。
- ・吉備姫王の場合、吉備の呼び名以外に、吉備嶋皇祖母の呼び名がある。そして、この姫王が生んだ二人の天皇(孝徳明天皇と京極天皇)の渾名は、孝徳が軽皇子であり、皇極が宝皇女である。つまり“軽”とは蘇我氏が支配し

ていた地域のことであり“宝”とは蘇我氏の財力を示している言葉だ。このことから推測されることは、吉備姫王は間違いなく蘇我一族と深い関係を持ち、更に糠手姫皇女と何らかの繋がりがあったことを物語っているように思われる。

今一つ『日本書紀』に気になる記述がある。それは皇極天皇 2 年(西暦 643 年)と天智天皇 3 年(西暦 664 年)の二回、二人の嶋皇祖母の死が書かれているのだが、それは、皇極 2 年の記述は“吉備嶋皇祖母薨りぬ”と書かれ、天智 3 年の記述には“嶋皇祖母薨りぬ”である。

実はこの二人の嶋皇祖母について『日本書紀』の訳者は、最初を吉備姫王とし、後を糠手姫皇女としているのだ。そうだとすると吉備姫王は皇極天皇の“母”なのに“祖母”はおかしい。そのことについて訳者は“祖”は尊敬語だと言っている。しかし、“皇”の字も十分尊敬の意味があるのだから、ここは素直に考えて最初が糠手姫皇女で、後が吉備姫王と考えるのが整合性があるように思えるのだ。さらに最初の皇女には“吉備嶋”が使われ、後の皇女には“嶋”としか使われなかったのは、『大化の改新』の後の蘇我氏に対する扱いが大きく変化した為であろうと考えている。

おわりに

二人の天皇の母となった“吉備姫王”という名前に興味を持ち、同時代に生きたであろう皇子や王女を調べていくうちに、複雑な人間関係と、天皇を中心とした豪族たちの権力争いが浮き彫りになり、いつの時代でも人間は同じようなことをやっている気がした。

それはさておき、私としての結論は「吉備姫王は吉備国とは直接関係ない」ということだ。

しかし、蘇我一族と吉備国との深い関係や、舒明天皇が蚊屋(賀陽)采女との間に蚊屋皇子をもうけたこと。児島屯倉と白猪屯倉の存在と白猪史がそれを管理していたことなど、この時代の大王権と吉備国との深いつながりを知ることができた。

また、余談ではあるが吉備姫王の墓の横に“猿石”なるものがある。これは飛鳥石造物群の一つとされ製作年代は定かではないのだが、これについては私はやはり蘇我一族との関係を示しているのではないかと思う。というのも、有名な『大化の改新(乙巳の変)』が起こる前、京中に蘇我氏を揶揄する童謡が流行るのだが、その中に、こういう歌がある。

☆ 岩の上に 小猿米焼く 米だにも 食げて
通らせ 山羊の老翁

※意訳・・・岩の上で小猿がしきりに米を焼いている。年老いたあなたも、せめてその焼き飯でも召し上がり、元氣を出して私たち女どもの前をお通りよ。ねえ、カモシカのおじいさん

この童謡は、蘇我蝦夷・入鹿父子が自分勝手に策謀をめぐらし、聖徳太子の家筋に当る上宮家の皇子たちを廃して、蘇我の血筋の古人大兄皇子を天皇にしようと企てた頃に流行ったものである。この他にも蘇我氏を猿に例えた歌があり、このことから吉備姫王の墓とされる墓は実は“堅塩媛”の墓ではないかと思われるのだ。それを裏付けるように推古 20 年(西暦 612 年) 2 月、『日本書紀』の記述に、「皇太夫人堅塩媛を檜隅大陵に葬る。この日軽の街に誅を奉った」とある。つまり欽明天皇と同じ場所を示しているのだ。

では吉備姫王の墓の記述“檀弓岡”とはどこなのか？それは桜井駅の南東側に広がる丘陵地で、忍坂(押坂)の地名が残る鳥見山麓古墳群の中に在ると思う。しかもここは前述の吉備嶋があった場所に近く、複数の岡が存在するからだ。しかし私の考えが正しければ、『日本書紀』の嶋皇祖母死亡の記述の最初が糠手姫皇女で後が吉備姫王であった場合)この檀弓岡は糠手姫皇女の墓ということになり、残念ながら吉備姫王の墓は分からないことになる。

いずれにしても古代史を紐解くとわからないことが多く、謎が謎を呼び、それがまた古代史を学ぶ魅力でもある。

シーボルトに関わる三人の美女の生涯 母タキ・娘イネ・孫タカコ（3 回目）

神戸市 ^{のせ}能勢 ^{はつえ}初枝

たかこ

孫の時代「何ごとも堪忍致さねば我身の切腹刀」

◆ 高子と周三の結婚生活

高子と結婚してからも、周三の関心はもっぱら勉強することにあつて、いわゆる新婚らしい甘い暮らしではなかったようだ。

周三は床を敷いて寝ということは少なく、机に向つて本を前にしたまま眠り、目をさますとすぐまた勉強にとりかかるという生活だった。高子は、周三が机に向つたまま眠ると、いつも丹前を後から着せかけてやった。

しかし、幼い高子は、結婚とはそのようなものだと思っていたのか、とくに不満は感じなかったらしい。彼女は若すぎた。

周三は名誉にも淡白で、出世する機会があつても断つた。

大洲中町にいたころ備前岡山から五百石で誘われたが行かず、宇和島から二百石で招かれても心を動かすことはなかった。ただ、勉強するだけが楽しみで、周三は昼も夜もほとんど区別なしに机に向かった。

高子は、自分たちの結婚について、宇和島藩主の伊達宗城が、周三を招くために自分を人質にとって置いたと思っていたと、後に語っている。そんな暮らしのなかでは、二人の間に子どもはできなかった。

周三は、語学のみでなく医師のこともシーボルトについて熱心に修業した。

本職の医者としては、慶応 3 年大阪に出て、大阪で病院開設に従っている。

ときは、明治政府草創多端の時で、戊辰役において負傷した多くの将卒の治療をいそぐ事情に迫られつつも、外科医は乏しかった。その中で蘭医ボードキン、三瀬周三、緒方維準は日本に於ける本格的な医学及医療の第一歩を踏み出した。

石井宗謙の子、石井信義ともそのころ、大阪で出会う。

明治 2 年 9 月、大村益次郎（村田蔵六）が京都木屋町で暴漢に襲われて、大阪病院にかつぎこまれると、ボードキンと周三、稲も従つて駆けつけた。彼等は最新の療法を以て臨み、生命を 70 日伸ばすことができた。このわずかの間に、益次郎は病床で、日本の兵制改革案として「徴兵令」を口述起草した。

この「徴兵令」は周三のノートによって出来上つたものだといわれる。

この 2 年前には、坂本龍馬が同じ京の近江屋で凶刃に倒れていた。

その後、三瀬^{もろぶち}周三は、諸淵と号して、明治政府のブレーン・トラストとして伊藤博文その他を説いて、大阪に造幣局を建設させ、大阪築港開設の建白をするなど、シーボルトの萬有科学の知識は、諸淵において見事に結実した。

また、あまり知られてないが、幕府の大政奉還は、正面からは坂本龍馬、後藤象次郎、岩倉具視等のはたらきであったが、裏面で徳川慶喜に世界の大勢を説き大政奉還を進言し、力を尽くしたのは、実に三瀬諸淵その人であったという。



結婚した高子と三瀬周三（諸淵）

明治 3 年には、周三は東京勤務となり、新妻の高子を伴って行く。

稲も上京して、京橋区築地で開業している。

暗殺など、不安定な季節ではあったが、周三は医学の世界の改革をめざした。その能力を認められ、明治 4 年^{とけいぎょうい}徒刑圀医局幹事となり、続いて明治 6 年には、新政府の命で、大阪医学校兼病院勤務になり、大阪に転勤した。

大阪医学校は、現在の大阪大学医学部の前身だが、そこには宗謙の養子石井信義（幼名久吉）も招聘されていて、二人は意気投合して、医学教育の基礎づくりに邁進した。彼等の授業は面白いと、学生たちに評判だったと伝えられている。

間もなく、周三は、東校を作るようにと命じられて、再び東京へ行く。

◆ 不幸が重なる高子

明治 10 年、高子の夫、周三がコレラに罹って、突然命をおとした。稲が一介の町医者として忙しく仕事をしていた時期であった。

周三は、東校をつくり、さらに、東京に病院と病理研究所を設立したいという希望を実現するために、昼夜を問わず頑張っていた矢先だった。

稲の落胆も大きかったが、高子の傷心を思って、かつて自分が、もう一度医業に志して立ち直ったように、高子にも医の道を学ぶことを奨めたが、高子の気持はすすまない。

大阪の石井信義から「都合がつかなくて、周三殿の弔問にどうしても行けないので」と、彼の下で働いている片桐重明という者を代理でよこした。

高子にとって義理とはいえ兄妹なのだから、信義に預けて教育してもらうのが一番だと稲は思いついた。ちょうどいい機会だ、高子を大阪へ連れて行ってもらうことを片桐に頼んだ。片桐はよろこんで引き受けた。高子は、あまり気が進まない様子ながら片桐と大阪へ発った。

大阪の高子からは、その後の様子を知らせて来ない。やっと届いた便りに、稲は愕然とした。

高子は、片桐に犯されて、妊娠したというのだ。愛する周三の子は出来なかったのに、意に反する男の子どもを孕んだ。

稲は、自分たち^{おやこ}親娘の呪わしい運命を思って言葉もなかった。

しかし、父無し子^{ててな}同然で育った高子のことを思って、その子どもまで父無し子にできない。「いっそ片桐と結婚させようか」と、石井信義に手紙で相談した。初めて知った信義は猛反対の上、激怒して片桐を破門にした。



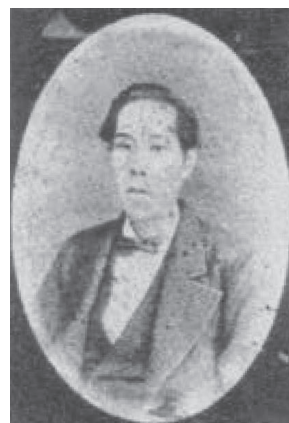
若い頃の高子

◆ 心根の優しい石井信義

石井信義（謙道ともいう）は、備前藩の医師石井宗謙が妾に生ませた子ではあるが、父親と違い不道德を嫌い、多くの人に愛された人柄であったようだ。

幕府の侍医であり、杉田玄白の『解体新書』の翻訳にも、若い頃から関わって来た蘭方医の桂川甫周、その娘の今泉みね女（みち）はその遺書『なごりの夢』で、

「石井信義さんと申しますと、背のすらっとした、やせ形の、まゆの濃い色の白い人でした。往来で貧民の子どもが泣いていると、立ち止まってあやさずにいられないと言う心底優しみのある方でした。またひとからあがめられるようになればなればなるほど、自分の出世を誇ることはなく、いつまでも御恩、御恩といって、時勢にあわなくなった徳川の者に同情して、父が病氣だと聞くとおいしいものをご自分



石井信義（謙道）

で提げてきてくれました。」

かつて彼の師であった桂川甫周は、明治の代になって時代の流れから外れ、苦しい生活を余儀なくされている。信義は、二女のみね女を自宅に引き取り、「おひいさま」と大切にしてくれたと、みね女本人が書く。

他方、父親の石井宗謙については、「宗謙様をも覚えておりますが、この方はいつも赤い顔をしてなんでも大変な御酒家だと言うことでした。桂川のうちに急病を起こしてひっくりかえったことがあり、みんなで大騒ぎして看病いたしました。」と書いている。

宗謙は酒が飲めないと、他の書にあったが、それは若い時のことで、晩年は酒におぼれていたのかもしれない。あるいは、稲とのことがトラウマになって、悩み深い苦しい人生を送ることになったのだろうか。

最後は幕府番書調所（洋書を読む役場）で翻訳に従事し、文久元年、66 才で亡くなっている。ただ、郷里勝山では、シーボルトに師事した大秀才として、いつまでも記憶されている。

息子の信義は、大阪医学校校長から、文部省医務局勤務に替わったが、身体が弱く明治 7 年に退職した。その後持病に悩まされながらも、翻訳作業を続け、明治 15 年、惜しまれながら 42 才の生涯を閉じた。

◆ 高子再婚、再び夫の死にあう

高子に話を戻す。稲は、身重の高子を連れて長崎へ帰ることにした。

高子は、医学よりは、箏曲に心惹かれて琴などつま弾きながら暮らしていた。

彼女には、稲の美、タキの艶、また石井宗謙の端正さなどまで、すべてを受け継いで、めったにいない魅力的な美人だった。彼女を見かけた多くの男性は心を奪われて、多くの結婚申し込み者があったが断り続けた。

明治 12 年、高子は望まない妊娠ではあったが、無事に男の子を生んだ。

稲は、その子を周三と名付けて、自分で育てる決心をした。そして若い高子には、多くの求婚者の中から長崎病院助教の医者山脇泰介を選んで、彼女を託すことにした。山脇は高子の過去を承知で、彼女を愛した寛容な人物だった。

彼は、のち佐賀県の唐崎病院の医院長になり、高子との間に一男二女をもうけた。長男は不幸にして幼くして亡くなったが、二人の娘は元気に成長した。この頃が、高子にとって、一番幸せな時期だった。

ところが、またしても夫泰介が、明治 19 年（1886）、悪性の胃腸カタルに罹患、急逝した。高子は二度も、夫に死別した。

突然一家の柱を失った高子たちを、経済的に支えたのは、泰介の兄で山脇学園の創立者山脇玄だった。

明治 22 年、玄のすすめもあって、高子一家と稲、周三は、上京して東京に移ることになった。高子の娘二人は、父親の違う周三を兄として自然に受け入れ、
稲と高子、周三と二人の娘（滝とタネ）の 5 人は、かつてシーボルトが改築に関わった麻生の西洋館に住んだ。



三瀬周三（弁次郎）諱を諸
ぶち 淵という

◆ 高子、箏曲界の第一人者に

高子は、泰介と暮らしていた時から始めていた琴にいつそうのめり込んで、山田流、生田流などの師匠の元へ熱心に通うようになった。

高子の二女タネの手記によれば、交通機関も発達していない時代、夜の明けぬ前、家を出て、遠い道を一人で歩いて出かけた。暗い道を女が一人で歩いているのを不審に思った警官に呼び止められることも再三再四だったという。

琴だけではなく、三味線や胡弓をも習得し、もともとこの方面に才能のあった高子は、いつしか第一人者として認められ、〈権大教正〉という最高位を得た。

天皇の侍従をはじめ、伯爵、子爵など上流階級の令嬢が競って高子の稽古を受けたがった。

しかし、そんな時でも、高子が娘たちに口癖のように言い続けたのは、「何ごとも堪忍致さねば我身の切腹刀」という言葉だった。

◆ 晩年の稲

62 歳になった稲は、娘高子が、二度の夫との死別という不幸を乗り越えて、自分の道を見つけたことに安心したのか、この度は産科医を開業していない。

シーボルトへの怒りはすでになく、むしろ彼の気配が残る洋館の家が心地いい、高子に琴の伴奏をしてもらいながら、好きな曲「残月」を三味線で楽しそうに合せている姿を何度も見たと、次女タネが書いている。

稲は、いつしか、父シーボルトを許容し、その学識やこの国のために果たした業績を尊敬するようになっていた。

やはりその功績を後の人に伝えたい、そのためには長崎の鳴滝の土地を楠本周三名義して、父のことを顕彰しようと考えた。

鳴滝の土地は、シーボルトが日本を去る時にタキに与えられたが、彼女はある時期、人に売った。二度目の来日を知った時、タキは買い戻してシーボルトの息子のアレキサンデルの名義にしていた。稲は、アレキサンデルと交渉して譲ってもらった。稲は知らないが、後の人が、その傍に『シーボルト記念館』を建てた。

また、シーボルトが、日本から持ち帰った品々は、オランダとドイツのシーボルト記念館に展示され、最近日本に逆輸入されて話題になることもあるが、それも稲は知らない。

息子にした楠本周三は、慈恵医学校を卒業して舞鶴の病院に勤務していたが、大正 9 年、42 才で死亡した。彼は稲より後まで生きはしたが、それにしても彼女の周りの男たちは、なぜみんな死に急いだのだろう。

稲自身は、終生、東京麻生の洋館に住み、明治 36 年（1903）、76 歳で亡くなった。好物の鰻による食中毒だといわれている。

大正 13 年（1924）、シーボルト渡来百周年の記念行事が、長崎・鳴滝近くの中学校で、盛大に行われた。主賓として招かれた高子は、はるばる東京からやってきた。「母高子にとって、生涯で最も耀かしい日であった」と、娘タネは書いている。（完）



晩年の稲



権大教正の衣装を着た高子



シーボルト

フィリップ・フォン・シーボルト

1796～1866。日本から帰った 1845 年、ドイツ貴族の娘ヘレーネと結婚。長男アレキサンデルのほか、長女、次女、次男が生まれた。ヨーロッパでは、諸学会の会員として多くの名誉を得た。余談だが、ドイツの飛行船で有名なツェッペリン伯爵はシーボルトの孫であり、高子の従弟にあたる。

吉備路風土記の丘に立つ 総社吉備路文化館

学芸員 豊嶋 乃女

総社吉備路文化館は、吉備路風土記の丘県立自然公園の中にあります。吉備路風土記の丘は、岡山県内でも特に貴重な遺跡が密集する、古代吉備の中心地のひとつです。

昭和 50 年（1975）、岡山県立吉備路郷土館として建てられた建物が、平成 24 年（2012）に総社市に譲渡され、市と（公財）総社市文化振興財団が所蔵する美術作品を収蔵、展示、また展示室の貸出しを行う施設としてリニューアルし、平成 26 年（2014）に開館しました。

周囲には国指定史跡の備中国分寺跡や備中国分尼寺跡、こうもり塚古墳など多くの史跡があり、また、四季折々の豊かな自然にも囲まれています。館内には総社市内の史跡や吉備路の歴史ガイドスコーナも設置し、ご来館の皆様にはウォーキングやサイクリングの足を休めながら、美術作品だけでなく古代吉備の歴史や自然美もお楽しみいただいています。

収蔵作品の中心は、総社市ゆかりの作家による作品と国内外の幅広い作家が揃う版画コレクションで、全部で約 1,300 点にも及びます。

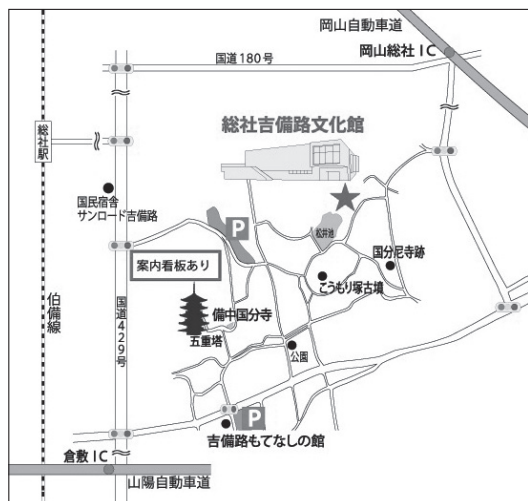
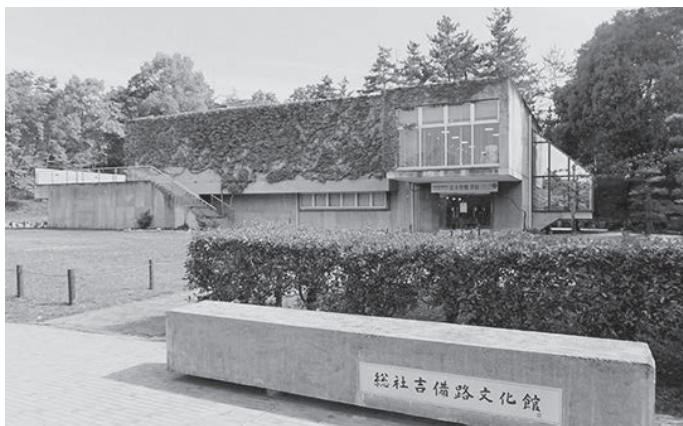
室町時代の“画聖”雪舟生誕の地である総社市は、他にも洋画家の満谷国四郎、日本画家の稲葉春生など、多くの芸術家を輩出しています。特に、文化勲章受章の書家・高木聖鶴の作品は約 100 点を所蔵。国内屈指のコレクション数を誇っています。当館の常設展示ではこれらの中から 5 点程度を常時公開しており、古筆への丹念な研究と独自の美意識に裏打ちされた優美な水茎を、落ちついた環境の中でゆっくりと鑑賞いただけます。

また、平成 26 年（2014）に寄贈いただいた約 1,000 点もの版画コレクション（森コレクション）は、ピカソ、ウォーホルから樋口五葉、棟方志功、駒井哲郎などに至るまで、国内外を問わず、幅広い作家や版種が網羅的に集められており、19 世紀から現代に至る版画というジャンルを一望することができる貴重なコレクションです。

当館では、これら収蔵作品を中心に年 3～4 回の企画展を実施しています。本年 12 月 2 日（日）までは、「森コレクション展Ⅱ 華麗なる版画の世界 ものがたりと共に在る美」を開催中。この展覧会では、聖書に基づく作品や戯曲の挿絵など、様々な「ものがたり」をテーマに、森コレクション版画作品の中から 41 点を展示しています。19 世紀末のイギリス人画家オーブリー・ビアズリー作《舞姫の褒美》は、そうした「も

のがたり」と絵画の結びつきをよく表す作品です。本作は、作家オスカー・ワイルドによる戯曲『サロメ』英語版の挿絵として描かれた連作の中のひとつで、クライマックス直前の場面を描いたものです。物語は、新約聖書に登場する、洗礼者ヨハネを斬首させたヘロデ王の娘のエピソードを基に創作されたもので、ヨハネに恋をしたヘロデ王の娘サロメが「七つのヴェールの踊り」を披露した褒美にヨハネの首を所望し、その口に接吻するというものです。ビアズリーの挿絵は、観る者に強烈なインパクトを与え、単なる挿絵の域に留まらずワイルドの『サロメ』と切り離すことのできない存在となっています。

当館は来年で開館 5 周年を迎えます。今後も収蔵作品を中心に様々な企画展を開催していきますので、吉備路風土記の丘散策と共に総社の文化と歴史をご堪能いただければ幸いです。



お知らせ

「小豆島の歴史と文化探訪」

去る 9 月 30 日（日）予定していた「小豆島の歴史と文化探訪」は台風のため、やむなく中止にしました。来年 5 月頃、改めて実施します。また案内を出しますので奮ってご参加下さい。

（事業委員 工藤 博）

会員消息

- ・顧問の松畑熙一先生は、11 月 3 日文化の日、瑞宝中綬章を受けられました。おめでとうございます。
先生は岡山大学で長年英語の教師を務められ、岡山大学副学長、中国学園大、中国短大の学長を務められました。
- ・山崎泰二副会長は、去る 10 月 27 日、全国歴史研究会創立 60 周年記念大会で、「歴史大賞」を受賞されました。おめでとうございます。
- ・中山幸子さんは、俳句集 1 号「漣（さざなみ）」に続いて第 2 句集「滴（しずく）」を上梓されました。
- ・井上知明さんは、9 月 13 日、歴研サロンで「洛中洛外図屏風から見えてくる歴史」と題して講演を行いました。室町時代から江戸時代に製作されたものの中で、最も古い信長が謙信に送ったことで有名な上杉本、及び岡山の池田家に伝わった林原本を中心に解説し、背後にある歴史を解説されました。
- ・富久豊さんは、先日、11 月 8 日の 11 月度の歴研サロンにおいて「吉備姫王（きびのひめみこ）」と題する講演を行いました。二人の天皇の母と言われる吉備姫王とはいかなる人物かという話です。講演に先立って話の内容の原稿を書いていたいただき、この会報に載せました。
- ・丸谷憲二さんは、去る 11 月 10 日、「備前西大寺地名考」と題し、百花プラザに於いて西大寺の地名の由来について講演をされました。
- ・高橋義雄さんは、来る 12 月 21 日、第 148 回、「岡山人物銘々伝を語る会」で「山田方谷の弟子・河合継之助」と題して講演を行います。司馬遼太郎が「峠」という小説に取り上げて一躍有名に。高梁市では継之助が逗留中に居とした茶屋が再建され当時が偲ばれます。果たして継之助は山田方谷から何を学んだのか。是非ご参加下さい。

編集後記

「岡山の底力シリーズ」第 2 回目が来る 12 月 16 日（日）高梁市成羽町出身で元京セラ会長の伊藤謙介氏を招いて開かれます。講演が楽しみです。

会員の富久氏の「二人の天皇の母“吉備の姫王とは」は先日、11 月 8 日、歴研サロンで発表されたものです。吉備と大和朝廷との関係は未だに謎めいていて興味をそそられます。

その吉備の中心地に立つ総社吉備路文化館を紹介してもらいました。高木聖鶴氏の書など、総社市出身の作家の作品他が展示してあります。

シーボルトに関わる 3 人の美女、最後は孫の高子です。人の世の巡り合わせの複雑怪奇を感じます。
（楠 敏明）

発行 岡山歴史研究会
会長 石井 保
編集長 楠 敏明
事務局 〒702-8002 岡山市中区桑野504-1
山崎泰二方
自宅電話（兼用）086-276-6654
FAX（専用）086-276-2241
ホームページ <http://b.okareki.net/>